

自然の姿の写生にヒントを得て、杉田玄白先生の医事は自然に如かずの、自然が頭に閃いたので、そうだ、僕は洪庵の格言と、玄白の格言の二つを組合わせて『医祖を仰いで』ではなくて『自然を胸に』とした。これぞ我が緒方富雄の格言です。「僕はもうこれから一生これで押し通すつもりです。で、あんたは、僕の格言をもらう第一号ですよ。大事にして下さい」と嬉しさを顔一杯に籠めてお渡し下さった。

緒方先生は、この昭和五十九年以後、入院―退院を繰り返され、昭和六十三年暮にはあの豊かな体は半分に痩せられた。

奥様、御家族の厚い看護の下に平成元年三月三十一日御自宅で往生なされた。

いまは心から緒方富雄先生の御冥福を御祈り申し上げます。

(茨城県古河市)

西川瀆八教授を憶う

三 浦 豊 彦

本年四月末、青森で弘前大学医学部の白谷三郎教授を会長として第六二回日本産業衛生学会が開かれた。今年はこちらで学会の創立六〇周年にあたり、学会長が「温故知新」を学会の思想とするということで、私が「わが国の産業医学の発展過程とその近未来像」という題で特別講演を依頼されていた。ところが学会の席で西川瀆八教授の急逝のことを知らされて、元気な様子だったのに驚いてしまった。そこで日本産業衛生学会の「労働衛生史研究会」の会員でもあった西川

教授に私の特別講演は聞いてもらえなかった。

実は西川教授は私よりかなり若い。数年前に日大医学部名誉教授にはなっていたが、日本体育大学の現役教授で、まだ活躍してもらわねばならぬ年齢だった。

私と西川教授は日本医史学会というより日本産業衛生学会での付き合いの方が長い。

西川教授は日本医史学会総会では、明治初年に各地に創立されやがて消滅した医学校をとりあげ、何回か報告して、医史学会でも関心の高い問題となっていた。

また京都帝国大学医科大学の創立者の一人坪井次郎教授の業績にも関心があった。

古い寺院の過去帳から寿命を推定する研究もあった。

一九八五年四月末のことであるが、西川教授から速達が届いた。川越市の喜多院特別展の招待券で、私が「職人尽絵」を一度見たいと希望を述べておいたのに対して、川越市に住む西川教授が思い出しているの好意であった。私は画集で知るだけの国の重要文化財で喜多院蔵の「職人尽絵」屏風を五月はじめにゆっ



西川瀆八先生

くり観賞することができた。

西川教授の逝去を聞いて、こんなことも思い出していた。

六月四日、西川教授の葬儀と告別式が、この由緒ある喜多院で執り行われた。合掌。

(労働科学研究所)